

女川のまちづくり　これまでとこれから

「これまで」 編

女川復興まちづくりデザイン会議

東北大学 准教授 平野勝也

復興を手伝うに当たって考えたこと

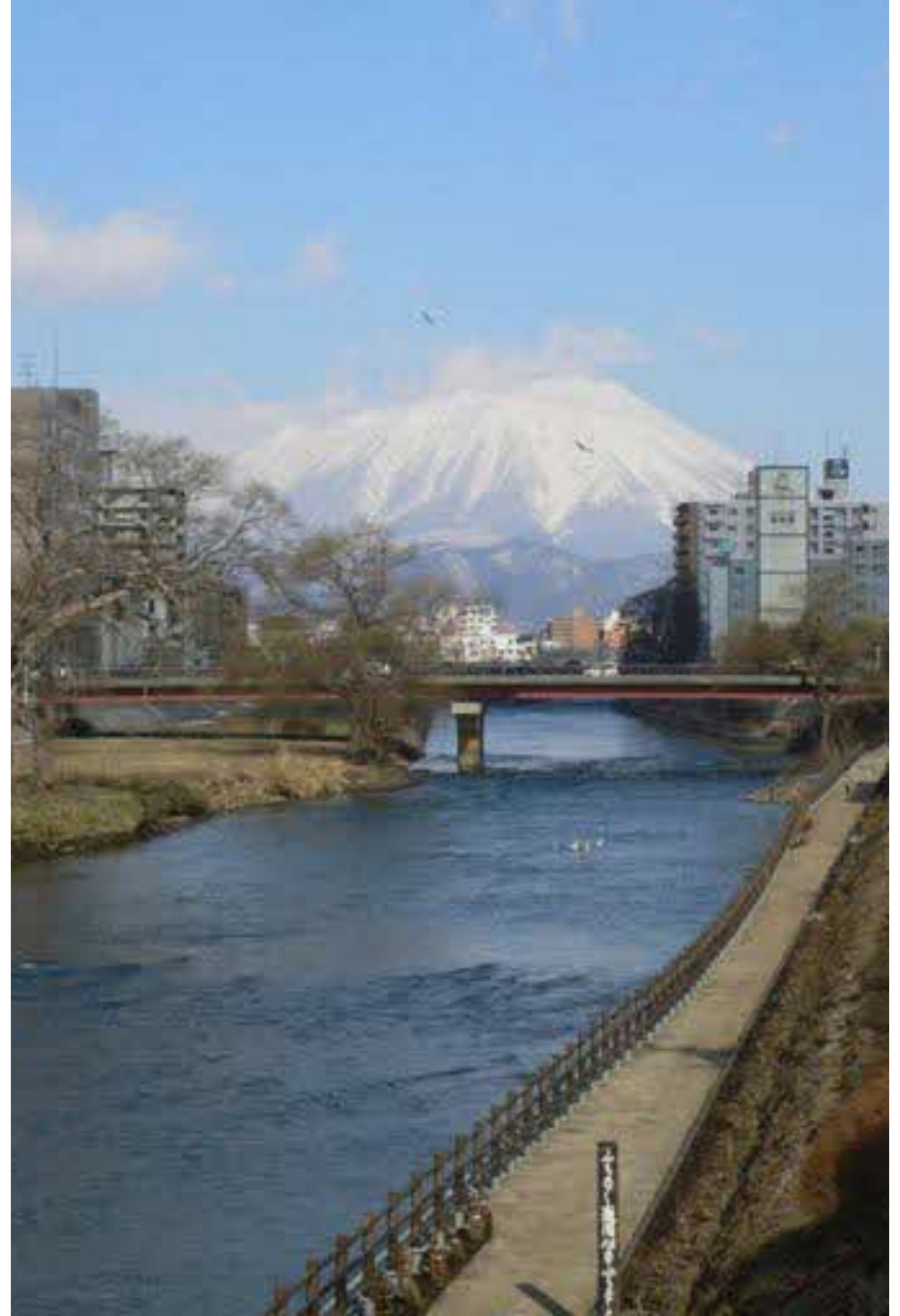
時を繋ぐ

- ・ 人間は、環境との結びつきで生きている。
 - ・ ex. 「住めば都」 結びつきが強いことが都となる
- ・ 津波が奪ったものは、「生命・財産」だけではない
 - ・ 折り重なる記憶の多くが失われた

時を繋ぐ

西欧の街は人工物が中心
日本の街は自然と共生

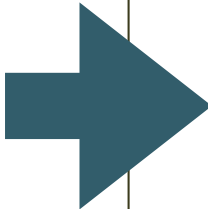
「流された」と諦めるのは早計
残ったものを大切に
自然との関係性の再構築



持続可能性が重要

時代は「都市開発」から「まちづくり」へ

	都市開発	まちづくり
目標	社会経済指標	愛着・誇り
事業の性格	大規模・単一 単目的 単一効果のデザイン	小規模・複数 多目的 相乗効果のデザイン
事業の 主役	事業主体	住民



稼ぐまちづくり



稼ぐこと＝持続可能性

コンパクトな街

歩いて暮らせる（歩いて楽しい）街

ネットの普及→モノではなく体験（コト）

→客数よりも客単価

→魅力ある空間づくり

街をつくるのは交通（車・人の流れ）と産業

人口減少時代の到来により、
渋滞混雑緩和のための交通分散施策から
地域価値維持のための交通集中へのパラダイムシフト

交通集中がなければ街の持続可能性は担保されない

復興を手伝うに当たって考えたこと

- ・時を繋ぐ（自然との関係性の継承）
- ・持続可能性のある街
 - ・コンパクトで魅力ある街
 - ・歩いて暮らせるor歩いて楽しい街
 - ・交通集中によるポテンシャル担保

まちづくりのこれまで

公共施設の整備②



計画レベルの原案

2012年12月時点の案

女川町中心部のバリューアッププランのコンセプト

どこからでも海が見える

住みたい、訪れたい、自慢したい風景の創出
安全・安心・暮らしやすいまちづくり

3つの基本方針

- ①海の存在を最大限に生かす
おんなこゝろの集合空間に、何が望みの眺望点と運動軸を決定する。
②もともとの地形を最大限に生かす
地形地質による自然の特色を生かして人工的な効果を加える。
③歴史の資産、歴史を免れた古い建造物の資源を最大限に生かす
林と人間とをいかに調和させ自然の環境を保全する。

整理的基本的思维方式

幾十年に一度は必ず来る津波に對しても無防備なまま

- 道路、河川等を境に山脈を築き上げて、数十年前に一度の豪雨でも水が
氾濫・暴用などにに対して安全な地域を作ることで整備します。
- 植物の再生保護活動：遊歩ルートが整備されました**
- 多くの人が苔藓史をもっと深く知って自然環境中心の暮らしにつなげる。
道路は、3年経つので広葉樹を撤去します。(新緑計画道路・駅前)
湧出地：沼田山麓野原（湧水も湧く）
- 子どもたちが遊びのびる。運動できるまち**
- 城山の公園や中央児童遊園地のネットワーキングを整備します。
 - 池田町からもよく見える池田町中心の森に遊具場所を設置します。
一貫してに特色ある公園づくりに参加しています。
- 子どもたちが安心して学べるまち**
- 新しい教育小・中学校は、国立の教育小・中学校と同様。
市立と同等水準の水準でも満足しない教育に整備します。
- まちの真ん中に、生活の拠点があるまち**
- 新しい公民館・中学校、保健福祉センター、図書館、生涯学習
センター、音楽センター、子育て支援センター、商業エリア、こ
ども園、ゆめばっ、公民館等、駅南東部を中心に集約配置します。
商業エリアには、市民が活用して、生活利便施設（生鮮食料
品店、飲食店、惣菜店、衣類店、靴屋、文具など）の
土地を提供します。（池田、けいぎん地区）

計画的な交通ネットワーク

通曉、超群等

- 高松市と岡田町の両高連係は、職員が兼任となり、車が共用でもって確保することができま。限られた両町を最大限に生かすためにひな高連係だけでなく、高連係の4町は基本的に互いの内とを、併せてきやま市の両高連係に加盟しています。
- 高松よりアや市の公民館に会館となる駐車場を計画しています。
- 有中心部の交通を担う都市が高連係を整備します。

● 研究報告

- ※月面参観は、平成27年2月に計画していたが、天候等の都合により中止します。

1904

- ・ 本年3～4月と連行計画について協議中です。

每片裝盒

- ・朝比奈氏の建設工事が行われ、形勢は西側に傾き、平定可なり。

河川、下水道、上水道

- ・二級河川に河川改訂中河川は、災害態勢防止するため、安全性を高める整備を行います。
- ・土砂災害警戒区域整備区域内では、河川改訂河川を主軸とし、分岐河川に河川下水道を通整備します。
- ・上流河川は、河川上流河川及び支川から取水し、河川分水嶺及び電源設備水線から供給二級水します。

公園・緑地

- 十分に給と成場を確保することをもって、燃料
供給保全、油価の低減に努めます。
加減の生活に異いと受ける影響を減らすには配
給にも努めます。



二つを一つに・逆順

2つあった中心街を集約

女川町中心部のバリュー・アッププランのコンセプト

どこからでも海が見える
住みたい、訪れたい、自慢したい風情の創出
安全・安心・暮らしやすいまちづくり

3つの基本方針

- ①海の存在を最大限に生かす
あまこしの海岸沿いに、海が見える眺望点と眺望軸を創出する。
- ②もともとの地形を最大限に生かす
地形地勢とできるがけを生かして人工的な防壁を抑制する。
- ③歴史的背景、防災を免れた公共施設等の資産を最大限に生かす
神社仏閣とけいふ公園や体育館等の公共施設を保全する。

整備の基本的な考え方

- 数十年以上は必ず来る津波に対しては浸水しないまち
- 国道395号沿いの山側を築き上げて、数十年以上は津波浸水もろもろ、費用・費用などに対して安全な地域をめぐって整備します。
- 建築物の真上避難経路・避難ルートが整備されたまち
- 多くの人が暮らすエリアから市街地中心の集合につながる道路は、3車線分の広幅員を確保します。（駅前広場道路・駅前通り・駅前山側道路・奥山側道路）
- 子どもも大人ものがのびるまち、活動できるまち
- 城立の公園や子供遊歩道ネットワークを整備します。
 - 各地域からもよく見える市街地中心の集合に遊歩道を整備します。
 - 真鍮ごとに特色ある公園の広場を整備します。
- 子どもたちが安心して遊べるまち
- 新しい駅前小・中学校は、特色ある駅前小・中学校と併設、やむを得ない状況でも浸水しない集合に整備します。
- まちの真ん中に、生活の軸線があるまち
- 新しい駅前小・中学校、駅前遊歩センター、駅前、生活学習センター、保健センター、子育て支援センター、商業エリア、市立図書館、市立公民館、駅前通り、駅前通り沿いに集約整備します。
 - 商業エリアには、市民が活用して、生活利便施設（生活利便品店、飲食店、物産館、公民館、郵便局、文庫など）の集約を誘導します。（誘導、計画段階中）

計画的な交通ネットワーク

道路、駅、バス

- 市街地市街地内の道路ネットワークは、幅員が狭く、車が多いため、歩行者が安全に歩けるように整備します。歩行者が安全に歩けるように整備します。
- 歩行者が安全に歩けるように整備します。歩行者が安全に歩けるように整備します。
- 歩行者が安全に歩けるように整備します。歩行者が安全に歩けるように整備します。
- 歩行者が安全に歩けるように整備します。歩行者が安全に歩けるように整備します。
- 歩行者が安全に歩けるように整備します。歩行者が安全に歩けるように整備します。

河川・下水道

- 二級河川女川川は、二級河川として整備するため、安全に歩けるように整備します。
- 二級河川女川川は、二級河川として整備するため、安全に歩けるように整備します。

公園・緑地

- 子供が安全に遊べるように整備するため、公園、緑地の整備を行います。
- 子供が安全に遊べるように整備するため、公園、緑地の整備を行います。

バス

- 高齢者に合わせて、バスバスの路線を調整します。
- 高齢者に合わせて、バスバスの路線を調整します。

駅前広場

- 駅前広場の整備工事が完了後、駅前広場の整備を行います。
- 駅前広場の整備工事が完了後、駅前広場の整備を行います。



生活軸・眺望軸の導入

自動車の生活動線を一本に集中
全ての住宅地に眺望軸

生活軸の導入

- ・ 街路型開発

自動車の生活動線を一本に集中
そこに歩行者空間をつなげ駐車場
で囲む
街路を中心にイメージを作る





自主的な景観づくり

街は公共空間だけでできているわけではない



協調による 使い勝手の向上

街は公共空間だけでできているわけではない

女川のまちづくりの特徴

- ・ 工_(住) → 商 → 住という順番
- ・ 二つの中心街を一つに（コンパクト化）
 - ・ 空地リスクを町が負担＆徹底した申し出換地
- ・ 生活軸の導入（交通の集中）
- ・ 眺望軸の導入（海が見える街＝自然との関係性継承）
- ・ 街路型開発
- ・ 主体的なまちづくり

都市景観大賞 国土交通大臣賞受賞

「しつこいとも思える質の追求」
(by 高見先生)

大賞 国土交通大臣賞

女川駅前レンガみち周辺地区

所在地 宮城県女川町
地区面積 約6.6ha
応募者 宮城県女川町、女川町復興まちづくりデザイン会議、独立行政法人都市再生機構宮城・福島復興支援本部、おながわまちづくり財団（登録・おながわ女川町復興事業共同企業体）、東洋橋・建築研究所・株式会社プラットデザイン、女川駅前商業エリア景観形成推進協議会、おながわレンガみち交流連携協議会

地区の概要

平成23年3月11日東日本大震災で発生した津波により、女川町では生活に必要なほぼ全ての機能が失われた。当地区は、新たに生まれ変わった女川町のシンボル空間であり、女川駅前広場とそこから女川湾に伸びる「レンガみち」を軸に商業・業務、交流、公共機能が集積するにぎわい拠点である。

「レンガみち」の沿道には、集客のコアとなる「シーパルピア女川」をはじめ種々の施設が立地し、海への眺望を生かして女川の新たな顔となる景観を生み出している。周囲の自立再建店舗・事業所においても、地域主導型で設立された委員会が、各事業者と建物デザインに関する協議を事前に行いながら、魅力的な景観形成に努めている。

前点施設が閉った平成29年5月の6日には、特別なイベントなしに町人口の10倍を超える7万7千人の来訪者が押し寄せた。また復興まちづくりの先導的モデルとして、多くの人々から注目を集めている。

平成30年4月には、「にぎわい拠点」の第二期造成工事が完了し、更なる自立再建店舗・事業所の集積が図られる。平成32年度には、「レンガみち」延長線上の「メモリアル公園」「海岸公園（仮称）」の一部が供用開始予定であり、更なる魅力の向上が期待される。



駅前広場から女川湾を一直線につなぐ「レンガみち」は、女川町中心市街地のシンボル軸として、「海を眺めて暮らすまち」という町の骨格を形成している。「レンガみち」の端は、元旦の日の出の位置に正確に向けられている。



「レンガみち」の幅員は、4.5+6.0+4.5（＝15m）で構成される。中央部分には、並木と照明灯を二列に配置し、海への眺望軸を形成している。沿道には木造大屋根が特徴的で集客のコア施設である「シーパルピア女川」が立地し、レンガみちへのデッキ張り出しや舗装の参み出しによって、にぎわいの具現を図っている。

審査調評

東日本大震災からの復興まちづくりについては、余りに広い被災地、甚大な被害のため、質より量、質よりスピードといった考え方が一般的とも言える。良好な都市空間、都市景観形成への取り組み姿勢は、ややもすると迅速な復興を助ける要因になるのではないかと、否定的とまでは言わないが、割けられているように見え受けられる。そのような状況、風潮の中スピードとともに質を追いかけ、それを実現させた女川町の復興事業は希有な例と言えるだろう。応募地区は復興後の女川町の中心となる地区で、この地区を含む広い地区における大胆な区画整理手法の活用がこの事業の鍵を握っている。この復興まちづくりでは、居住地区を高台に移転させる必要性から、低地部は非居住所の利用となり、そこにあった被災者の土地を高台と入れ換え、駅前この地区に町有地をまとめることで、駅前商業地区を一挙に実現した。その上で、デザインチームによる「しつこいとも思える質の追求」そしてガイドラインに基づく個別建物の誘導など、良好な都市空間実現のためにかけられた大きなエネルギーを感ずる。まさにゼロから作る中で、できる限りのことを限られた時間の中で実現した。この事業の機軸を作った町長をリーダーとする行政。これに忠実したUR及びその実働部隊となったコーディネーター、多彩なデザイナーたちの見事な協業。今回の復興事業で二つ目があるのかは疑問であるが、まさに復興都市デザイン、復興事業による景観形成の優良事例といえよう。（高見）



駅の正面を人の空間として開放し、「レンガみち」と一体的にデザインされた駅前広場。駅の北側には芝生広場と「女川フェーチャーセンター Camus」を配置し、大人から子供まで、町内外の人々がにぎわい、集える空間を創出している。



「レンガみち」を軸とした組織式。沢山の集客だけでなく、町民や観光客も一掃になって駅前新顔が盛大に迎う。官民が一緒になって作り上げた都市空間が、質に賞され、賞ある場所となっている。

こうしたことは、表面的な話でもある

女川まちづくりの本質

- ・ 壊滅的な被害から、もう一度、愛する「女川のために」、借金背負ってでも再興すると「覚悟」を決めた町民の「強さ」
- ・ そういう若い衆をきっちり支える重鎮
- ・ そうした前向きな空気が新しい「覚悟」を持った人を呼び込み好循環を生む

着任して間もなく、東日本大震災から現在までの町の歩みを知っておかなければと新聞販売店主の阿部喜英さんを訪ねた。

数時間に及ぶレクチャーは衝撃の連続だった。まちづくり会社によるエリアマネジメント、商業地の所有と利用の分離、補助金に依存せず自力で稼ぎ出す地域の循環の創出――。一民間事業者が復興のグランドデザインを一人称で話す。その後も多数の関係者に話を聞いて回ったが、やはり全員が町の復興を「自分ごと」として語るのだ。「女川の復興過程はただ事じゃない」と直感した。

岩波ブックレット No.981

「3.11を心に刻んで2018」 岩波書店編集部編
河北新報社（関根梢） 「Ⅱ 復幸の設計図」 p118